

ドイツ諸邦がオイレンブルクに託した夢 ビスマルクによって実現する

奥 正敬

オイレンブルクの来日

アメリカのペリー提督来航より遅れること 7 年余り、1860 (万延 1) 年の 9 月から 12 月 (旧暦では 7 月から 10 月、以下、日本国内の事のみ旧歴を記載) にかけてプロイセン (現在のドイツ) を中心とする関税同盟、ハンザ諸都市やメクレンブルクが計画した東アジア遠征艦隊の 3 隻が次々と江戸湾に錨を下ろしました。この艦隊は当初、最新鋭の蒸気コルベット艦アルコーナー号を中心に 4 隻で編成されていました。しかし、伊豆沖で嵐のためスクナー船 1 隻が消息を絶ち、江戸湾に投錨した時には 3 隻になっていました。

来航の目的は 1858 (安政 5) 年に日本、即ち徳川幕府がアメリカをはじめ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスなど欧米の国々と締結していたものと同様の修好通商条約を結ぶため、プロイセンのフリードリヒ・オイレンブルク伯爵 (Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg, 1815-1881) が全権公使を務め、艦隊乗組員を含めて約 700 人で構成されていました。その中には、初代駐日公使となるマックス・フォン・プラントを筆頭に、職業外交官や官僚、自然科学者、画家、写真師、園芸師、商業関係者など、広く各界で活躍する人物が含まれていました。

代表団を派遣したドイツ諸邦の事情

この遠征艦隊を派遣するために大きな役割を演じたプロイセンは未だ国内統一の途上にあり、オーストリアやデンマークなどの近隣の大国との武力対立や紛争の種を抱えていました。こうした中であっても、プロイセンはもとより他のドイツ諸邦、さらにはハンザ諸都市を含めたこの地域の産業や経済は大きく発展し、1850 年代にはこれらの国々や諸都市が派遣した商船隊がマラッカやバタビア、さらには中国沿岸などへ進出するようになっていました。この通商活動は東アジアの国々と条約を結ばずに行われており、既に条約を締結していた欧米諸国が東アジアにおいて、「共通の利益による連帯性」⁽¹⁾ という観点からプロイセンをはじめとするハンザ諸都市の人たちを保護し便宜を与えていました。このような状況下で、プロイセン政府が日本、シナ (中国)、シャム (タイ) への通商条約締結のための代表団を送ることを決定し、ドイツ諸邦やハンザ諸都市もこれに参画して実現したものです。

日本国内の社会と条約締結

この頃の日本国内はペリー来航時のように、外国船来航についての大きな驚きは無かったようですが、同年の 3 月には桜田門外で大老井伊直弼が殺害されており、幕府の開国政策に対抗する攘夷派の動きは激しさを増していました。こうした中で江戸上陸を果たした代表団は、アメリカ公使タウンゼント・ハリスの支援を受けて幕府との間で交渉を始めましたが、交渉過程で代表団と幕府との通訳を務めていたアメリカ公使館書記官のヘンリクス・ヒュースケンが路上で斬殺されるなど、この代表団を取り巻く雰囲気は日ごとに厳しさを増していました。

このような事件を経ながらも、オイレンブルクを代表とする幕府との修好通商条約の締結交渉は継続的に進められましたが、幕府にとってこの交渉相手が所謂、国家連合体であることから難航を極めました。幕府は老中安藤対馬守信正らの指揮のもと、終始プロイセン以外のドイツ諸邦諸国との条約締結を拒み続け、結局 1861 年 1 月 24 日 (旧暦では万延元年 12 月 24 日) にプロイセン一国との条約を結んだのです。

このため、ドイツ諸邦の中でも、特に日本との条約締結で最も利益があると思われていたハンザ諸都市関係者たちの落胆は大きかったものの、代表団を戴せた遠征艦隊は長崎を経て日本を離れ、次の訪問国であるシナへ向かいました。

プロイセン国内ではこの代表団の成果について大変な喜びで報じられましたが、関税同盟、ハンザ諸都市、さらにはメクレンブルクではプロイセンに対する不満が生じ、その後ハンザ諸都市の艦船が日本の港に入港する際には、プロイセン国旗を使用せずに従来から便宜を受けていたオランダやイギリス、アメリカなどの国旗を掲げていたと言われていました。

『東アジア遠征記』

この遠征艦隊に随行した人たちが残した記録や回想録は 15 種にもおぼると言われており、これらの書物の中に、日本観や日本人論⁽²⁾ と共に条約締結交渉を扱ったものが幾つかあります。

プロイセン政府が収集した資料に基づいて A. ベルク (A. Berg) など複数の人物が記述し、最も権威があるものと言われている *Die preussische expedition nach Ost-Asien.* (『東アジア遠征記』、同書のうち日本遠征に関わる部分は、中井晶夫氏